「予科練」第460号　令和2年9月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

予科練

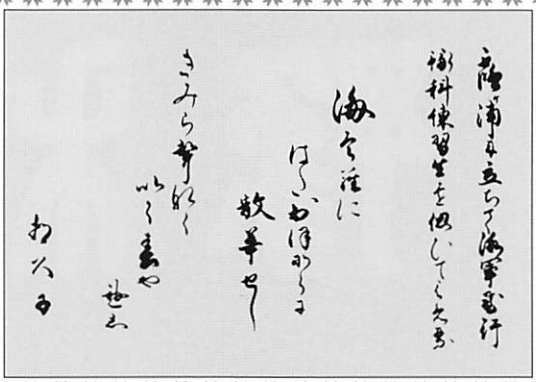
No.460　令和2年

9・10月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.2… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生書簡》…… 3
○令和二年度評議員会議事録…… 4
○令和二年度新任役員紹介…… 5
○第五十三回予科練戦没者慰霊祭祭文…… 6
○貸借対照表・正味財産増減計算書・財産目録…… 7
○三四三空隊史②…… 10
○予科練の戦争　十七才の陸攻パイロット⑯…… 14
○私の昭和史…… 17
○寄付者芳名簿…… 23
○事務局日誌…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　予科練の碑　No.2

慰霊碑　雄翔園二人像

この碑は昭和四十一年五月二十七日に故高松宮殿下を名誉顧問に推戴し、元教官並びに一般民間人等の有志と予科練生存者（予科練の碑建立委員会を設立）が同期同窓の戦没者英霊の御霊・慰霊顕彰の為に、嘗っての教育航空隊であった旧土浦海軍航空隊（現在陸上自衛隊武器学校）内の一部・雄翔園の聖域に立地して、予科練二人像を作成して建立致しました。

前回掲載しました横須賀空では今後に対処するには狭隘になる見通しから、土浦空としましたが、未だ未完成の為霞ヶ浦空に昭和十四年移転し、翌十五年末に基礎教育を受ける予科練習生が入隊しました。その後十八年には飛行専修予備学生も入隊して、一万名を超える海軍搭乗員の基礎教育の中心的役割を果たす教育の殿堂となりました。

土浦空で基礎教育を受け、飛練教程に送り出した各種各期は次の通りでした。

乙種十五・十六・十八・十九・二十
甲種八・九・十・十一・十二・十三
丙種二～十一・十六

祖国の防衛に身命を捧げた予科練生の御霊顕彰の中心的存在の慰霊碑と言っても過言では無いと思います。

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

書簡

（練習生当時・土浦海軍航空隊から）

館山空所属
海軍上等飛行兵曹
第八期甲種飛行予科練習生

船田義範　福島県・二十歳

今日もまた上天気で、空には雲一つない状態でした。この頃は全く眠い時節です。総員起床は五時半ですが、五時十分頃まで、ぐーぐー寝ているような有様です。洗面して朝の宮城遙拝、御製奉唱、体操です。三日、五日と外出で、嬉しい日が続きます。

三年生になって、伝馬船を習いはじめました。初めはなかなか漕げなかったのですが、この頃は断然上達して、相当漕げるようになりました。

十八日から辻堂に演習に行きます。五日間です。気分が良いから申し分なしです。

家もなかなか忙しいようですね。お母さんの写真、出来たら一枚お送り下さい。待っています。

さようなら

父上様

昭和十九年十月二十日、小笠原方面海域の船団護衛のために八丈島基地を発進して対潜哨戒の任務終了帰投中、敵機に遭遇し被弾、自爆する。

公益財団法人海原会
令和二年度（第四十八回）評議員会　議事録

令和二年度（第四十八回）評議員会は新型コロナウイルス感染拡大防止のために、開催を見送り、海原会定款第十九条（決議の省略）に基づき、理事長起案の提案書を郵送して行う、みなし決議により審議を行いました。以下、その議事内容について記載します。

一　みなし決議事項提案者
　公益財団法人海原会
　　代表理事　菅野　寛也

二　みなし決議時期
　令和二年六月十五日

三　みなし決議参加者
　評議員（定数六名）
　評議員　久保山賞一
　評議員　津島　裕
　評議員　岩舘　芳雄
　評議員　手塚　巌
　評議員　小野　昌美
　評議員　明石　英次

四　議事録作成者
　専務理事　平野陽一郎

【議事録】

令和二年五月十八日、理事長菅野寛也が、評議員の全員に対して令和二年度評議員会の決議の目的である事項について左記の内容の提案書（海原会第四一一号）を発したところ、当該提案につき、評議員の全員から書面により同意の意思表示を得たので、海原会定款第十九条（決議の省略）に準用される一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第一九四条の規定に基づき、当該提案を可決する旨の評議員会の決議があったものとみなされた。

記

一　評議員会の決議があったものとみなされた事項の内容

（一）第一号議案
（その一）令和元年度事業報告について
公益財団法人海原会令和元年度事業の実施状況を、添付資料「令和元年度事業報告書」のとおり報告する件
（その二）令和元年度決算報告について
公益財団法人海原会が執行した経費について、添付資料「令和元年度決算報告書」のとおり承認する件
（その三）監査結果報告について
公益財団法人海原会の令和元年度監査結果を、添付資料「令和元年度監査報告書」のとおり報告する件

（二）第二号議案
（その一）令和二年度事業計画について
公益財団法人海原会が令和二年度に実施する事業を、添付資料「令和二年度事業計画」のとおり報告する件
（その二）令和二年度収支予算について
公益財団法人海原会が令和二年度に執行する経費について、添付資料「令和二年度収支予算書」のとおり報告する件

（三）第三号議案
海原会定款の一部改正について
海原会定款別表第一基本財産（公益目的事業を行うために不可欠な特定の財産以外のもの）を別添資料「評議員会みなし決議資料」のように改正することを承認する件

（四）第四号議案
令和二年度人事について
（その一）理事の選任について
退任した理事二名の補任として、添付資料「評議員会みなし決議資料」のとおり二名の理事選任を承認する件
【退任した理事】
助村隆典　氏（埼玉県所沢市以下省略）
早川昭二　氏（神奈川県大和市以下省略）
【選任された理事】
湯原豊一郎　氏（茨城県稲敷

郡阿見町以下省略）
湯原豊一郎氏は、就任承諾書を提出して理事就任を承諾した。
山下桂子　氏（茨城県稲敷郡阿見町以下省略）
山下桂子氏は、就任承諾書を提出して理事就任を承諾した。

（その二）評議員の選任について

退任した評議員の補任として、添付資料「評議員みなし決議資料」のとおり二名の評議員が選任されたことを報告する件

【退任した評議員（平成三十一年一月十五日付）】
渡辺勲　氏（神奈川県中郡大磯町　以下省略）
【選任された評議員】
湯原弘　氏（茨城県稲敷郡阿見町以下省略）
石引大介　氏（茨城県稲敷郡阿見町以下省略）

（五）第五号議案

大森事務局の移転について

大森事務局の移転について、検討を開始することを承認する件

二　評議員会の決議があったものとみなされた事項を提案した者の氏名

公益財団法人海原会
代表理事　菅野　寛也

三　評議員会の決議があったものとみなされた時期

令和二年六月十五日
（全評議員の同意書が事務局に到着した月日）
評議員（六名）全員の同意書は別添のとおり。
なお、提案事項について特別の利害関係を有する評議員はいなかった。

四　評議員会議事録の作成に係わる職務を行った者の氏名

評議員会の決議があったものとみなされた事項を明確にするため、本議事録を作成し、議事録作成者が記名捺印する。
令和二年六月十五日
議事録作成者
専務理事　平野　陽一郎
（添付資料等については紙面の都合上全て省略します。）

令和二年　新任役員紹介

評議員　湯原　弘

この度、評議員を拝命しました湯原弘と申します。
予科練戦没者慰霊碑除幕式が行われた昭和四十一年五月地元土浦駐屯地に勤務しておりました。当時この予科練の碑を建立された関係各位の想いとともに、予科練の歴史と伝統を継承することの大切さを痛感しております。今後は微力ではありますが、海原会の発展のために努めて参りたいと思いますので会員の皆様にはご指導をよろしくお願い申し上げます。

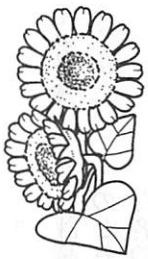
評議員　石引　大介

この度、評議員に就任いたしました石引大介と申します。
私は予科練平和記念館、雄翔館がございます阿見町で生まれ育ちました。当館に保管・展示されている当時の資料などで戦争について学びました。これらの戦史の記録を風化させることなく、次世代へ継承して行く事が必要であると考えております。
戦没予科練の御霊をお守りすると共に、その功績を伝承するため活動してまいりますので、会員の皆様からのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げ就任のご挨拶とさせていただきます。

理事　山下　桂子

この度、図らずも理事に就任いたしました、山下桂子と申します。

高松宮妃殿下の御歌「海はらに、はたおほそらに散華せし、きみら声なくいく春やへし」に深く思いを致し、今更ながらではありますが、予科練揺籃の地である阿見町に生まれ育った者の責務として、微力ではありますが、海原会の事業運営等に努めさせていただきたいと思っておりますので、会員の皆様には倍旧のご指導ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。



理事　湯原　豊一郎

この度、理事（霞ヶ浦支部担当）を拝命致しました湯原豊一郎と申します。

戦没予科練の皆様が同窓生やご家族に遺された貴重な遺品や遺影を後世に確実に伝承するとともに、記念碑等施設の維持管理に携われますことを光栄に思います。

自衛隊入隊以来、何度となくこの地で学び、そして永住の地と定めた「縁」を大切に、会員皆様の力を賜りながら微力ではありますが精一杯務めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

第五十三回予科練戦没者慰霊祭　祭文

海原会会長　小林　和夫（乙飛十九期生）

本日ここ予科練二人像前において第五十三回予科練戦没者慰霊祭を挙行するにあたり在天の英霊に謹んで申し上げます。

いま、日本は新型肺炎ウイルスの感染拡大という未曾有の国難と戦う日々を過ごしております。本来であれば、全国から皆様のご親族や、同窓あるいは同級の予科練生多数が参集し、盛大に慰霊祭を執り行う予定でありましたが、目に見えない敵と戦うためにはやむを得ない判断として、本日ここに参集いたしました海原会の代表者による献花と黙祷により、英霊の皆様の御霊をお慰め申し上げます。

かつて皆様がその命に替えて守った日本を、今回は我々一人

一人が団結して必ず守りぬく覚悟であります。

世界中の国が、強制力をもって地域の封じ込めを行う中、我が国においてそれは許されず、ただただ国民の自主に待つしかないとういう制約された状況下で、今大きな成果を得ることができておりますのは、先の大戦や東日本大震災の時にもそうであったように、国難にあっては国民が一致協力して立ち向かうという古来より培われて来た大和民族の偉大さでありましょう。まことに誇らしい限りであります。われわれ生存予科練同窓も今日では全員が卒寿を迎え、昨年の慰霊祭を共に過ごした甲飛十五期の助村隆典君、乙飛二十三期の渡邊勲君を始め多くの同窓生が、英霊の御元に旅立ってまいりました。私ども同窓生は、その命の灯が絶えるその時までこの碑を守り続け、慰霊の誠を捧げて参りますことを改めてここにお誓い申し上げます。

終わりにあたり、昭和四十一年五月、この地を我々予科練同窓永遠の地と定め、予科練之碑を建立し、雄翔館を建設して以来、五十四年という長期間にわたり、それらの維持管理にご尽力をいただいております陸上自衛隊武器学校長始め職員の皆様、そして武器教導隊長を始めとする隊員の皆様に深甚なる敬意を表しますとともに、その配下の皆様を海原会の役員としてご差遣いただいております武器学校OB会の皆様に心から感謝申し上げます。

加えて、「予科練の町」阿見の皆様には八十年前十一月土浦海軍航空隊として開隊以来力強いご支援を頂いている事に対して心から感謝申し上げます。

最期になりましたが、予科練戦没者の御霊安らかならんことをお祈り申し上げるとともに、出来得ることならば、今日国難と戦う全国民に英霊の皆様のご加護があらんことを請い願い、簡単ではありますが祭文といたします。

令和二年五月二十九日

公益財団法人海原会

会長　乙飛第十九期生　小林　和夫

貸借対照表

令和２年３月31日現在

公益財団法人　海原会
公益目的事業会計

（単位：円）

科目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	205,315	357,955	△ 152,640
普通預金	2,094,039	1,028,357	1,065,682
郵便振替	490,732	131,998	358,734
現預金合計	2,790,086	1,518,310	1,271,776
貯蔵品	306,200	456,200	△ 150,000
預け金	0	0	0
仮払金	19,439	0	19,439
流動資産合計	3,115,725	1,974,510	1,141,215
2．固定資産			
(1)基本財産			
有価証券	0	50,000,000	△ 50,000,000
普通預金	65,000,000	20,000,000	45,000,000
基本財産合計	65,000,000	70,000,000	△ 5,000,000
(2)特定資産			
遺品等補修及び雄翔園整備特定費用準備金	0	5	△ 5
特定資産合計	0	5	△ 5
(3)その他固定資産			
土地	11,894,726	11,894,726	0
建物	3,928,731	4,126,818	△ 198,087
構築物	1,936,989	2,173,949	△ 236,960
その他の固定資産合計	17,760,446	18,195,493	△ 435,047
固定資産合計	82,760,446	88,195,498	△ 5,435,052
資産合計	85,876,171	90,170,008	△ 4,293,837
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	0	248,889	△ 248,889
預り金	9,189	9,189	0
流動負債合計	9,189	258,078	△ 248,889
固定負債合計	0	0	
負債合計	9,189	258,078	△ 248,889
Ⅲ　正味財産の部			
1．指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2．一般正味財産			
正味財産合計	85,866,982	89,911,930	△ 4,044,948
負債及び正味財産合計	85,876,171	90,170,008	△ 4,293,837
備考	財務諸表に対する注記に記載しているため付属明細書は省略する。		

正味財産増減計算書(税込)

公益財団法人　海原会　　平成31年４月１日から令和２年３月31日まで
公益目的事業会計

(単位：円)

科目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
(1)経常収益			
基本財産運用益	[50,000]	[50,000]	0
基本財産受取利息	50,000	50,000	
普通財産運用益	[418]	[238]	180
普通財産受取利息	418	238	
募金収益	[1,646,000]	[1,107,247]	538,753
受取慰霊寄付金	[19,000]	[5,500]	13,500
受取会費	[2,054,000]	[2,355,000]	△ 301,000
広告料収益	[260,000]	[275,000]	△ 15,000
雑収益	[118,574]	[114,526]	4,048
経常収益計	4,147,992	3,907,511	240,481
(2)経常費用			
事業費	[7,627,429]	[9,947,170]	△ 2,319,741
慰霊顕彰事業費	(4,185,542)	(6,515,358)	△ 2,329,816
慰霊祭費	465,279	819,869	△ 354,590
霞ヶ浦支部活動費	202,164	127,705	74,459
遺族支援調査費	0	8,875	△ 8,875
関係団体費	103,000	124,000	△ 21,000
給料手当	1,291,680	1,416,564	△ 124,884
会議費	41,927	28,786	13,141
旅費交通費	318,299	366,901	△ 48,602
通信運搬費	351,310	353,110	△ 1,800
消耗品費	142,826	186,471	△ 43,645
渉外費	68,442	285,103	△ 216,661
光熱水料	89,284	92,955	△ 3,671
租税公課	0	74,123	△ 74,123
印刷製本	0	14,670	△ 14,670
会費受取手数料	46,038	36,714	9,324
顧問報酬	337,576	0	337,576
建物管理費	364,403	364,592	△ 189
減価償却費	363,314	294,510	68,804
雑費	0	51,768	△ 51,768
遺品等整備経費	0	1,868,642	△ 1,868,642
機関誌発行費	(3,297,893)	(3,292,689)	5,204
機関誌発行費	1,532,600	1,494,279	38,321
給料手当	667,680	730,056	△ 62,376
会議費	21,673	14,836	6,837
旅費交通費	164,531	189,090	△ 24,559
通信運搬費	181,595	181,982	△ 387
消耗品費	73,828	85,645	△ 11,817
渉外費	35,378	130,946	△ 95,568
光熱水料	46,152	42,694	3,458
租税公課	0	34,044	△ 34,044
印刷製本	0	6,738	△ 6,738
会費受取手数料	23,797	18,921	4,876
顧問報酬	174,496	0	174,496
建物管理費	188,363	187,900	463
減価償却費	187,800	151,782	36,018
雑費	0	23,776	△ 23,776
支援金	(143,994)	(139,123)	4,871
青少年育成支援金	100,000	100,000	0
給料手当	16,640	19,380	△ 2,740
会議費	540	393	147
旅費交通費	4,100	5,020	△ 920
通信運搬費	4,526	4,831	△ 305
消耗品費	1,840	0	1,840
渉外費	882	0	882
光熱水量費	1,150	0	1,150
租税公課	0	0	0
会費受取手数料	593	502	91
顧問報酬	4,349		
建物管理費	4,694	4,968	△ 274
減価償却費	4,680	4,029	651
雑費	0	0	0
管理費	[565,511]	[850,507]	△ 284,996
給料手当	104,000	114,000	△ 10,000
会議費	3,376	2,317	1,059
旅費交通費	25,628	29,527	△ 3,899
通信運搬費	28,285	28,417	△ 132
消耗品費	11,500	14,322	△ 2,822
渉外費	5,510	21,897	△ 16,387
光熱水料費	7,189	7,139	50
租税公課	116,460	5,693	110,767
印刷製本費	0	1,127	△ 1,127
支払手数料	21,849	26,096	△ 4,247
会費受入手数料	3,707	2,955	752
顧問報酬	27,179	540,000	△ 512,821
建物管理費	29,340	29,340	0
減価償却費	29,253	23,701	5,552

科　　目	当　年　度	前　年　度	増　　減
雑　　費	152,235	3,976	148,259
経常費用計	8,192,940	10,797,677	△ 2,604,737
評価損益調整前当期増減額	△ 4,044,948	△ 6,890,166	2,845,218
投資有価証券評価損益等	[0]	0	
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 4,044,948	△ 6,890,166	2,845,218
２．経常外増減の部			
(1)経常外収益			
経常外収益計	0	0	
(2)経常外費用			
経常外費用計	0	0	
当期経常外正味財産増減額	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 4,044,948	△ 6,890,166	2,845,218
一般正味財産期首残高	89,911,930	96,802,096	△ 6,890,166
一般正味財産期末残高	85,866,982	89,911,930	△ 4,044,948
Ⅱ　指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	
Ⅲ　正味財産期末残高	85,866,982	89,911,930	△ 4,044,948
備　　考	財務諸表に対する注記に記載しているため付属明細書は省略する。		

財 産 目 録

公益財団法人　海原会　　令和２年３月31日現在

公益目的事業会計　　（単位：円）

貸借対照表科目	場所・物量等	使用目的等	金　額
Ⅰ　資産の部			
１．流動資産			
現　　金	手元保管	運転資金	205,315
預　　金	普通預金 三菱東京ＵＦＪ銀行 霞ヶ浦支部		2,094,039
仮 払 金			19,439
郵便振替			490,732
貯 蔵 品	阿見と予科練	予科練顕彰資料	306,200
流動資産合計			3,115,725
２．固定資産			
（１）基本財産			65,000,000
基本財産	有価証券 野村證券浦田	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業（公１～公３）に使用している。	0
基本財産	普通預金 三菱東京ＵＦＪ銀行	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業（公１～公３）に使用している。	65,000,000
（２）特定資産			0
遺品等補修及び雄翔園整備特定費用準備金	普通預金　三菱東京ＵＦＪ大森駅前支店	特定費用準備資金として公１事業のために使用している。	0
（３）その他固定資産			
土　　地	25.54 平方メートル 東京都品川区南大井6-16-12 大森コーポペアネーズ建物持分	法人の基礎となる財産であり、公益目的保有財産として、事務所が所在する大森コーポの土地（法人持分）で、95％の割合を公益目的事業で使用している。 また、５％の割合を２号財産として法人管理に使用している。	11,894,726 (11,299,990) (594,736)
建　　物（大森コーポペアネーズ）NO402,403,404	65.55 平方メートル 東京都品川区南大井6-16-12 大森コーポペアネーズ３室分	事務所 法人の基礎となる財産であり、公益目的保有財産として、95％の割合を公益目的事業で使用している。 また、５％の割合を２号財産として法人管理に使用している。	3,928,731 (3,732,294) (196,437)
構 築 物（山本五十六像）	茨城県稲敷郡阿見町青宿 121-1 陸上自衛隊武器学校構内雄翔館前に設置	公益目的保有財産であり、予科練記念館に設置して公－１事業に使用している不可欠特定財産である。	1,936,989
その他の固定資産計			17,760,446
固定資産合計			82,760,446
資産合計			85,876,171
Ⅱ　負債の部			
１．流動負債			
未 払 金	京浜印刷（株）		0
預 り 金		源泉所得税	9,189
流動負債合計			9,189
負債合計			9,189
正味財産			85,866,982

三四三空隊史②

攻撃目標を呉軍港とする敵は、松山基地を鳥瞰しながら北上南下することになり、F4U、F6Fの一部が断続して地上銃撃に入ってきたが、そのほとんどが飛行場北辺に廃材で造られた囮列線に真剣な攻撃を加えたために、兵器分隊（二宮大尉）工作科が構築した二十粍機銃陣地は有効に働いて、負傷者を出しながらもF4U五機を撃墜している。

戦は終り、午後に入ると大分その他の基地から逐次帰投してくる紫電改、彩雲を収容する一方、陸路あるいは落下傘降下した米軍機に関する各町村からの情報が次々と入電し、戦果の裏付けがなされた。古賀整備主任指揮の捜索隊が通報によりF6Fの不時着パイロット捜索のため、九万温泉に派遣されるという一コマもあった。

【感状】

第三四三海軍航空隊

昭和二十年三月十九日敵機動部隊艦上機ノ主力ヲ以テ内海西部方面ニ来襲スルヤ松山基地ニ邀撃シ機略ニ富ム戦闘指導ト尖鋭果敢ナル戦闘実施トニ依リ忽ニシテ敵機六十余機ヲ撃墜シ全軍ノ士気ヲ昂揚セルハ其ノ功顕著ナリ仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和二十年三月二十四日

聯合艦隊司令長官

豊田副武

この日の戦闘は錬成後一歩というところでの邀撃戦であったが、歴戦の基幹搭乗員に互した若者の編隊戦闘は斬新であり、美事であり、一機でも多く撃墜しようとする闘志に応えて二十粍機銃も十分にその威力を発揮してくれた。

数日後、二宮武大尉は司令の指示で、撃墜した米戦闘機の装甲板に対する二十粍機銃弾による貫徹テストを行った。「それには徹甲弾を使用したが、当時弾種の組み合せは飛行隊の希望に依っており、搭乗員からは炸裂弾、焼夷弾の希望が多く、徹甲弾は余り使用せず或は全然入れない場合もあったかも知れない」と述懐している。

川上陽平氏（当時技術大尉）は、「二十粍二号弾薬包については改修前のもの及び昭和十六年以前にスイス・エリコン社から購入し日華事変漢口攻撃時に膅内爆発事故を発生した弾薬包を軍需部が部隊に出したことが判り、危険性があるため鹿屋地区笠ノ原（鉾部隊）から始めて国分、鹿児島、松山と見て廻り回収しましたが、大村に行く前に終戦になりました。若し今回の紫電改（七月二十四日空戦と思われる城辺町の海没引揚げ機）が大村基地として徹甲弾があるとすれば（事実約五〇〇発の中に数発あった）輸入エリコン弾が混入されたかも判りません。紫電改が部隊配備になる頃は徹甲弾は全く生産しておらず又部隊にも使用しない様指示しておりました」と笹尾叔亨氏（技術大尉）からの資料と共に知らせていただいた。

さらに引続いて制空作戦に備えて、燃料消費計測飛行が行われた記録がある。

特乙一期松村育治飛長は三月十九日、嶋大尉の四番機として出撃したが、嶋大尉も三番機斉木世一飛長（特乙一期）も共に還らず、その後林隊長の率いる各隊四機（計十二機）の沖縄作戦テスト飛行に隊長の四番機として参加、不時着時に火傷を負い隻眼を失った。

この時は各機、全弾装備、増槽満タンで瀬戸内海を岡山・大分間で二時間半飛行している。四月一日第五航空艦隊に編入された。

沖縄対九州の状勢はもはや今までのような訓練期間を与えてはくれずそればかりか紫電改の足をもってすれば松山は余りに懐の内すぎた。

司令は意を決して最前線鹿屋への進出を決心された。

五、出陣—鹿屋・第一国分へ

先に台湾を叩いて比島に上陸した如く、九州、内海西部を叩いた敵は四月一日沖縄本島に上陸作戦を開始した。

豹部隊、虎部隊がそうであったように剣部隊も一合戦の後、戦闘四〇一からの補充を加えた新編成で十分の訓練をする時間もないまま、五航艦の制空部隊として四月上旬鹿屋に進出した。零戦ほど航続力のない紫電改では、そこからでも喜界島附近までの制圧作戦がほどほどのところであり、鹿屋は沖縄方面の最前線基地として種々の航空部隊がひしめいていた。

四月十二日菊水二号作戦による南西諸島方面制圧、特攻機空路啓開の目的で菅野大尉指揮の下に彩雲一機、紫電改四十二機（内二機不調のため取止め、八機引き返す）が発進し、奄美大島、喜界島上空で南進中のF6F二十機、F4U三十機を捕捉攻撃、さらに東方よりF6F三十機が加わって乱戦となった。成果F6F撃墜二十機（内二機不確実）、F4U撃墜三機（内一機不確実））と報告された。我が方は未帰還十一機（橋本中尉、新里上飛曹外）の外不時着三機を出している。

進出が早かった三〇一菅野、松村各中隊に七〇一から山田中隊が加わった編成であったが、設営直後で整備の条件も悪く、誉二一型発動機の不調も続いていたため引返えし機の続出による編隊の崩れも影響したと考えられるが、我が領域内とはいえ、敵の哨戒区域に進攻しての遭遇戦という形は今後会敵ごとに相当の犠牲を強要される現実に直面したことを覚悟しなければならなかった。

四月十五日一四五〇、即時待機が発令された。飛行場指揮所への情報は『敵編隊、種子島北上中』続いて『佐多岬上空』と伝えられた。『早いぞ！』と感じて見張る上空にキラッと光る機影があった。小型機である。『発進止めます！』と報じて信号機を卸し、列線に伝令しようとした時には既に紫電改が一機、続いてさらに一機西に向かって離陸を始めていた。

も早や止める術もない。万事休すと仰ぐ上空に敵の一群は流星の如く一直線に降っている。奇蹟を祈り見守る目の前で一番機は高度五十米にも達しないまま翼を裏返して滑走路の外れに消えた。這うようにして遠ざかる二番機も降り注ぐ射線の下にあった。事態は瞬間に起り瞬間に去った。一番機は杉田庄一上飛曹、二番機は宮沢豊美一飛曹であった。待機列線も例外ではあり得なかった。間に合って離陸を止め避難した一群のうち、下川学上整曹も敵弾に斃れた。

鹿屋は特攻機の発進基地でもあり、出て征く機、還って来る機の輻輳は伝令の遅滞、混乱を招きやすい。十六日の制空出撃を最後として第一国分基地への転進が決定された。

そこは鹿屋ほど広くもなく施設も充分ではなかったが、飛行機隊運用のための間合いも僅かながらとることが出来た。

敵作戦のテンポは早く、大型機の来襲が始まった。紫電改をもってするB―29の攻撃法について各隊長は熱心に研究し意見も交わされたが、結局は『やって見る。その実績の上で』ということのようであった。

たまたま、四月十八日朝、基地北端の天誅組列線一帯はB―29の爆撃を受けて一工曹高田忠義外二名が戦死し、小室一整曹外九名が重軽傷、続いて二十一日の邀撃で林隊長の列機の清水俊信一飛曹はB―29攻撃中発動機に被弾し蕨島西方海面に自爆し、地上では桜井良雄二整曹外一名が爆死する等、天誅組にとっては厄日の連続であった。思いつめた林喜重隊長の様子はただならぬものがあり、市村分隊長、鴛渕、菅野の両隊長、司令から交々慰められ激励された翌二十二日、B―29を邀えて敢然と出撃したが、林隊長は遂に還って来なかった。剣部隊結成以来相互に切磋琢磨してきた両隊長、深く信頼された司令の感慨追悼もさることながら、比島この方慈父の如く慕って来た四〇七隊員の衝撃は一入であり、連日の爆撃を受けた基地に注ぐ落陽も心なしか殊の外赤く映えるかと感じられた。

第一国分での作戦は四月二十五日をもって終了し、剣部隊は態勢を整えて大村に移ることになった。

飛行機隊が大村に向けて発進

した後、各隊員は陸路大村に、一部は松山経由大村に移っていった。維新隊の中島少尉は大村中尉に率いられ豊原、高橋等数名の搭乗員と共に二十七日雲上からの爆撃に遭いながら基地を離れて別府経由二十九日に松山に帰隊している。

五月四日紫電改十二機が大村に向かって飛び発つのを見送った直後、〇八三〇松山基地もB―29の爆撃を受け、市岡少尉外十名が戦死し七名の重軽傷者を出した。五月十日にもB―29の来襲を受け広江上整曹外四名が戦死し八名の戦傷者を出している。四〇一（豊田隊長、中村先任搭乗員）も殉職者を出しながら、連日錬成と機材の補充に大童であった。

六、死闘―大村基地

飛行機隊は四月三十日までに大村に移動を完了した。大村は海軍戦闘機隊の古巣の一つで九〇戦、九五戦、九六戦とそこで飛び発つ機種は変遷し、昭和十二年七月十五日には木更津空の九六陸攻二十機が暴風雨を突いて渡洋爆撃に飛び発った基地でもある。やがて零戦が飛び交うようになり、そのパイロット達の多くが中国大陸、太平洋、印度洋の各地に散華していった。今、新鋭紫電改を駆る若い隊長、隊員が祖国興亡の危機に向って背水の陣をこの基地に敷くこととなった。布陣を定めるべく隊長達と額を集めた飛行場の一角でたまたま特別攻撃に備えて訓練中の若い搭乗員数名と遭った。彼等は十三期甲飛（十七才）の若人で九三中練でもっぱら特別攻撃に備えて元山で訓練する光部隊の隊員であることを聞かされて、一同ただ無言であった。やがて夕日の落ちる飛行場を斜めに横切って歩いていった飛行服の後姿は、今もなお厳粛な感銘裡に瞼に残っている。

指揮所は竹松駅側、飛行場東側に集中し、四〇七だけ湾側とし列線は基地の北と東周辺の掩体地区と決定し、その後工作科は乏しい器材でたゆみなく指揮所宿舎を山側に移して行った。

隊長を失った四〇七には分隊

戦闘四〇七（天誅組）飛行隊

長として新鋭速水大尉が横空から着任。続いて飛行隊長として林啓次郎大尉が服部大尉、篠田上飛曹ほか十数名を伴って南方から着任し、隊長不在中ひたすら天誅組隊員の志気の鼓舞に努めた本田分隊士、下鶴先任下士もホッとしたようであった。

かくして「天誅組」も新しい体勢で昼夜に亘る暴れん坊となっていった。三月転任された中島副長の後に発令されていた相生副長も着任されて、剣部隊の陣容はさらに整った。

五月早々、沖縄方面の南西諸島作戦に加え北九州地区に来襲したB―29の邀撃の外、九州西方海面に執拗に出没する敵飛行艇の哨戒偵察攻撃に対しても、捕捉撃墜が企図封殺の唯一絶対の手段であるとの主旨の下に、佐鎮との緊密な連繋を得て徹底した掃蕩作戦がとられ、箕浦一飛曹、大関、廣上飛曹三機の未帰還を出したが、逐次成果を挙げて六月三日で終了とされた。沖縄を支援する米艦隊に対する特攻攻撃が熾となるに従い南九州に対する敵の空襲は五月末から激しくなった。

六月二日、林啓次郎天誅組隊長を指揮官とする紫電改二十一機が鹿児島上空に敵艦載機群を邀撃したのに始まり、もっぱら南西諸島方面の作戦に集中されたが、会敵地点は喜界島から漸次九州南部にと近まり、一方機材の補充も激減し松根油混入、水メタノール噴射等、燃料等の粗悪化に対する措置もなされたが整備工作員の苦闘は言語に絶するものがあった。

沖縄の戦況は正に凄絶であり、五航艦司令部も剣部隊の稼動率の低下を勘案してか、司令に対して特攻の下問もあったが、体当り攻撃は如何なる事態にあっても下令すべきものに非ず、万一その下令のあった場合は搭乗配置の最上級士官から始めるべきであること、なお、現状勢は自発特攻の機に非ずとの判断をもって司令の一任とし、隊長には飛行長からその主旨を伝えるに止めたのもこの頃である。

沖縄玉砕（六月二十三日）後、敵の攻勢は一段と激化した。四月鹿屋基地で出会い本人の意志を確めて司令から上申された老練磯崎大尉、杉田飛曹長の代りにと上申された武藤少尉も漸く着任したが、稼動機数は思うに任せず、六月二十二日鴛渕大尉率いる三十一機が奄美大島、喜界島上空に敵艦載機群を捕捉攻撃した戦で第二中隊天誅組二代目隊長林啓次郎大尉機も、石井正二郎上飛曹外二機と共に未帰還となった。

七月五日、大村基地はP―51、B―24戦爆連合の来襲を受け、邀撃した木下一周大尉外二機が還らず、地上では高村信次郎上整曹外九名が戦死十二名が重軽傷を負い、続いて九日の爆撃（P―38四機、B―24約四十五機）では成田康上整曹外五名が戦死し十一名が重軽傷を負っている。それ等は時限爆弾を交え明らかに飛行場の制圧封鎖を企図したものであった。

七月二十四日、呉軍港に来襲した艦載機二百余機を邀撃のため飛び発った紫電改は二十一機、これは三月十九日、略同数の敵を邀え撃ったときの一ヶ飛行隊の数に過ぎない兵力であった。佐多岬上空、鴛渕大尉の突撃下令で「前に出て、武藤金義機を左下方に見ながら増槽を落して突込んで行ったのが彼との別れであった」と帰投後松村大尉は語っている。この日、剣部隊編成以来の総隊長鴛渕大尉、「杉田の代りに」と懇望入隊した武藤少尉以下六機還らず。（戦後史城辺町の項に詳述）八月一日、初代三隊長のうちただ一人残った菅野大尉は、二十一機を率いて南進し、屋久島北方を北上中のB―24、P―51の連合四十機を捕捉し、老練磯崎大尉もそれに続いた。反復攻撃中高度六千米からP―51型六機が奇襲して来て次第に乱戦となった。菅野機は右翼に破口を生じながらこれを掩護追従する歴戦の堀（三上）飛曹長機に向って拳を振って「征け！」と号令し、単機戦闘を続けたまま終に還らなかった。（前述紫電改の項に述べた原因による二十粍機銃弾の膅内爆発と推定されている。）

次号に続く

予科練の戦争

久山　忍　著

十七才の陸攻パイロット⑯

甲飛十二期　海軍一等飛行兵曹　青井　潔

バリックパパン攻撃は、予定通り昭和二十年七月二十三日の満月を期して行われる。当初の通り、一式陸攻二機、九六式陸攻二機の計四機で決行する。

攻撃隊の発進は午後九時三十分であった。

出撃機の腹の下には二五〇キロの三一号爆弾と、六〇キロ瀑弾六個が取り付けられた。エンジンの試運転も上々である。

私の予備機は残留となった。私も基地の人たちと攻撃隊の出発を見送った。

夕暮れになると東の空に赤味を帯びた大きな月がぽっかりと顔を出した。昼間の余熱がまだ冷めない。さりとて汗が出るほどでもない。攻撃隊出撃前の緊張とあわただしさで基地には熱気が溢れている。

いよいよ攻撃隊の出発である。車輪を止めているチョークが外され一番機が動き出す。期せずして「万歳」の声が沸き起こる。

時に九時三十分、晴れ渡った空はあくまで美しく、中天にかかった月は、地上でこれから死地に赴く若人たちがあろうことなどしらぬげに澄みに澄みきってる。

全機飛び去った。祭りの後のような気の抜けた気分であった。残留者一同がぞろぞろと指揮所に引き上げた。

以下は攻撃に参加した搭乗員の手記からの抜粋である。

バリックパパンの上空に最初に達したのは一式陸攻の一、二番機がほぼ同時であった。

日本軍の抵抗が極めて弱いことを知っているためか、米軍が所有するバリックパパン基地は全く無警戒の様子であった。地上にはあかあかと電灯がともり、まるで歓楽街のような明るさであった。

そこへ日本機が次々と爆弾を投下した。一式陸攻の爆撃に驚いた地上の米軍はいっせいに迎撃の態勢を整えた。そこえ進入してきたのが九六式陸攻の二機であった。

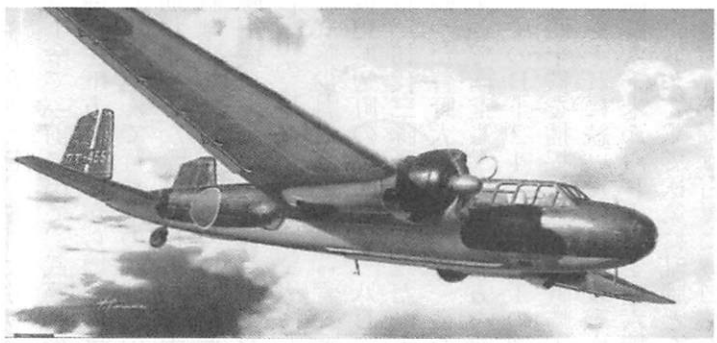
爆撃針路に入る前から各機の前後左右に地上砲火が炸裂しはじめた。中部天蓋の二〇ミリ機銃にとりついていた蒲地一整曹が電探欺瞞紙を勢いよく撒き始める。欺瞞紙は風圧に奪われてあっという間に機の後方に月光を反射しながら飛び去っていく。とたんに地上砲火が機の後方で炸裂し始める。欺瞞紙が効いているのだ。爆撃針路に入った二機は安全を取り戻した。

ジャワ基地の指揮所では興奮が最高潮に達していた。つぎつぎと爆撃成功、四機が帰途についた様子が電波に乗って入ってくる。ジャワ基地では攻撃はおおむね成功したと判断を下し、我々に「攻撃隊帰隊に備え」を命ずる。

機上で負傷者が出ているかもしれないため、医務課の救急車が待機する。損傷を受けた機があることを想定し、着陸時の事故に備えて消防車が待機する。

月は西に傾き夜明けが迫る。やがて北東に爆音が聞こえ、一式陸攻一機が姿を現わした。もう一機の一式陸攻も無事に帰還した。

九六式陸攻の一機はスラバヤ航空廠に不時着したとの報告があった。しかし、九六式陸攻のもう一機は未帰還となった。



帰還

昭和二十年七月二十八日いよいよアエルタワルへの帰途につく。

ふたたび目指すはジョホール基地である。さらばジャワよ。また来ます。基地関係者が帽子を振って見送ってくれるなかを格好よく離陸した。機首をシンガポールにむける。

さあ、今度は単機マイペースでご帰還。天候がジャワ海を少し行ったビリトン島の手前から変わりはじめた。往路の夢のような天気とは大違い。海面は見えるが遠望が利かず島影も確認できない。

だんだん雲が行く手をさえぎりはじめ、操縦席の風防ガラスにパラパラと雨がかかる。しばらく針路を変えず厚い雲に突っ込んでは出て、抜けては突っ込むの繰り返しであった。前方にかなりの高さを持った積乱雲が現れた。これはとても抜けきれない。機長に相談して針路をやや右に振る。高度も上げる。行けども行けども雲また雲である。数分間、雨の中を強行突破する。

操縦輪を握っている私はそれほど深刻には考えなかったが、後ろに乗っている連中はハラハラしたことであろう。なにせこちらは若年操縦員である。陸攻の飛行時間六〇〇時間足らずである。ベテラン搭乗員がうようよしていた緒戦の頃であれば、まだ副操縦士でしか通用しない身分である。

その新米が大型機を悪天のなかで操縦しているのである。

高校生が運転する大型バスが山岳地帯の道路を突っ走っているようなものである。同乗している者たちが心配でたまらないのも当然であった。

しかし、人間何でも一人前に扱ってみるものだ。操縦輪を握る私は意外や自信満々である。隣に同期生の中でも操縦のうまさで知られた加藤が座っているのも心強い。気のおけない仲だから何でも相談できる。他の搭乗員の心配をよそに今日の洋上飛行は順調であった。

やがてリンガ諸島にさしかかる。雲のため視野は利かない。高度は二〇〇〇メートルを維持することにする。往路と違って太陽が見えないのが寂しい。

やがて雲量が減りはじめた。前方に島影や陸地が見える。シンガポールの市街もみえる。あと一息だ。

セレター軍港が見えた。その向こうはジョホールだ。ジョホール基地は南にジョホール水道を控え、北側にマレー半島の蜜林と丘陵地帯を背負っている。滑走路は東西に一本、たいていの場合は東から西にむかって降りる。第三旋回から第四旋回、そして着陸パスへと視野もよく降りやすい。滑走路との相性は人それぞれであろうが私はなんとなくこの飛行場と性があっていた。着陸はなんなく成功、この夜はジョホールに一泊した。燃料補給をして翌日、我々はアエルタワル基地に帰った。

終戦の日の飛行作業

すでに昭和二十年八月十日ころには戦争終結への聖断にむかっていたようだが、我々のしるところではなかった。まして遠く離れた南方のことである。士官たちの間にもその気配はなかった。

昭和二十年八月十五日の午前は予定通り訓練場にむかった。我々の機は一キロ訓練爆弾十二個を抱いていた。空にあがると快晴の海上で右回りのコースをまわった。私は吉田中尉の指示通りの針路を保ち、

「用意、テーッ」

の命令を待った。やがて命令がくだり、爆弾を投下した。二発目か三発目で「命中」の声が伝わってきた。標的の真ん中から白煙が昇っているという。機を傾けて見ようとしたがすでに目標上空を通過して確認できなかった。他機との関係もあっていつまでもうろうろできない。実戦では弾が機体を離れたら直ちに避退に移らなければ撃墜されてしまう。操縦員はいつまでも弾着にこだわれない宿命を負っている。

昭和二十年八月下旬にはバリックパパンの再攻撃が予定されている。おそらく攻撃隊の中で私が一番若い操縦員になるはず

だ。訓練弾が命中したことによりみんな上機嫌で帰ってきた。出撃前の訓練でいきなり命中とは幸先がいい。一同、晴れ晴れとした顔で指揮所前に整列し、吉田中尉が地上指揮官八島大尉に訓練の終了報告をした。今日一日は何か良いことがありそうな気分であった。トラックで兵舎に帰り、昼食をすませた。

そこえ突然、いつも朝礼に使っている椰子林の広場に航空隊総員集合の命令がかかった。なにごとだろうとみながやがやと集まった。日頃顔をあわせることの少ない砲術科、運用科、工作科、主計科、医務科の分隊も続々とやってきた。我々搭乗員は、

「これは内地転勤だ、いよいよ本土決戦だ」

と言う者が多かった。

本土決戦でいよいよ年貢の納め時がきた。それでも内地に行けることは嬉しいことだった。どこへ行くかはわからない。どんな編成で進出するかは上の人たちが決めること。ひょっとしたら死ぬ前に一度くらい親の顔が見られるかもしれない。そんな淡い希望を抱いて集まった。

壇上にあがった人は五月に少将に昇進した三好司令ではなく、井上慶太郎少佐だった。この人は兵からたたきあげた温厚な老少佐である。開口一番、彼は静かに言った。

今日までの諸君の奮励努力にかかわらず、戦況利あらず、我が国はポツダム宣言を受諾して、終戦を決めた。天皇陛下から詔書が出され、その趣旨を徹底するために、皇族をはじめとする軍使が当方面にも派遣されることになった。

詔書には忍びがたきをしのび、耐えがたきを耐え、祖国の再建に尽くせと仰せられている。

今後どんな困難が待ち構えているかわからないが、諸君は軽挙妄動することなく、そろって内地に帰還する日まで軍紀を崩さず、一致協力、日本海軍有終の美を飾ってもらいたい。

これから各自兵舎に帰って後の令を待つように。

最初に感じたのは言いようのない不安感である。

やあ、これはえらいことになったぞ。私はこれからどうやって日本に帰るのか。いつ帰れるのか。南方には陸海軍人のほかに邦人がどれだけいるか計り知れない。日本の輸送船は壊滅している。

どうやって人を運ぶと言うのか。私のような若僧に順番がまわってくるのはいつの日か。気の遠くなるような話だ。はたして自分は日本に帰れるのだろうか。次に浮かんだのは失望感であった。ああ、俺は失業した。あの物資欠乏の暗い暮らしから逃れ、一生を帝国海軍航空隊で食わせてもらおうという甘くはかない夢は一瞬で潰れた。そしてここ数日の不思議な体験を思い出した。

私はこのところなかなか眠れなかった。深夜、一人用の蚊帳のなかで自分の指に懐中電灯を当てる。若い指先が美しい桜色に輝く。それを見ながら、

「この生命みなぎる五体は父母からもらったものだ。この体がいつ空中で霧散するのだろうか。爆発は一瞬である。五体は血の霧となってあっという間に姿を消す。そのとき入れ物を失った俺という男の魂はどこへ行くのか。受け皿をうしなって永遠に空をさまようのではないか。ああ、なんというあわれであろうか。なんとむごいことであろうか」と悩んでいたある夜、とつぜん阿弥陀様が目の前にあらわれた。そして仏像で見慣れたあの慈悲深き阿弥陀様が玉砕の運命をたどっていた私の魂をひょいと手のひらに受けとってくださった。

そう感じたとたん。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

という念仏が口についてでた。すると不思議や、すーっと気持ちが軽くなって寝入ってしまった。こんなことがここ数夜つづいていたのである。それだけにこの終戦さわぎが不思議で仕方なかった。

私は、阿弥陀様に救われた気分であった。わが家が何宗であるかも知らないのに。

そんなことを考えたあと、

（ああ、もう飛行機に乗らなく

てよくなった）
　というけしからぬ安堵感が湧いた。
　しかし、この喜びの気分はすぐに消え、空への憧れで身を焼くような思いに駆られた。
（ああ、もう一度、操縦輪を握りたい。空を飛びたい）
　という渇望が私の魂をゆさぶった。そう思った直後、今度は生きることができる喜びがうずうずと体内に湧いてきた。
（たくさんの日本兵が死んだ。だが俺は生き残った。十七、八歳で死ぬつもりだったのが六十歳まで生きられる。あきらめていた子孫もこの世に残すことができる）
　そして、生きることがゆるされた私の想いは突拍子もない方向にとんだ。
（今、この瞬間にも、この世のどこかに未来の伴侶たるべき人が息づいているのだ）
　という思いが不意に突き上げてきた。家庭を持つことができる。もう一度、勉強ができる。どんな仕事にも就くことができる。死を免れた私の将来に無限の可能性が突然あらわれたのである。
　しかしすべては内地に無事に帰ってからの話である。それまでに何が起こるかわからない。どんな苦難を乗り越えねばならないのだろうか。果たして無事に帰れるだろうか。帰れたとしても、はたしてそれはいつのことだろうか。
　再び不安がひろがった。
　以上が、終戦を知ってから兵舎に帰るまでの、わずか二〇〇メートルの間に私の念頭を走ったことどもである。
　帰路、全員でがやがや喋りながら帰った。そのとき何を話したか覚えていない。
　はしゃぐ者はいなかった。沈んでいる者もいなかった。興奮している者もいなかった。みな言葉を慎んでいたようだ。うっかりしたことは言えない雰囲気であった。
　はてさて、これから私の前途にどんな運命が待ちうけているのか。
　祖国はまだまだ遠い。

完

私の昭和史

海原会会員
平野　八代子

第六章　敗戦そして逃避行

　戦いが終わって何日が過ぎた頃になって、遠くの方で〝ドカン　ドカン〟と音が始まり、飛行機の爆音に寝間着のまま外に飛び出しました。見上げた空に明るく光る物体がゆらゆらとゆれて、外はまるで昼間のような明るさとなっていました。その時になって初めて照明弾だと気付く暢気な自分に腹がたったりもしました。アメリカの飛行機ではなくロシアの飛行機だったことを、後に知ることとなりました。ロシアと日本は日露戦争時の講和条約があるのに、しかも終戦後の宣戦布告とはまるでハイエナだと思いました。戦いはまだ終わってなかったんだ。身の危険を感じ、母と妹に冬の重ね着をさせ下着も何枚もつけさせ、妹には身の回りの物を思いつくまま学校の鞄に詰め込ませました。夏の一番暑い時でしたが、暑さを感じないくらいに三人とも緊張で震えました。父が出征前に母にお金を渡し「どうなるかわからんから、この金を隠して日本に帰れ」と渡していたことを思い出し、母に保管場所を聞いたところ、母は食器棚の皿の間と炭俵の炭の中と言ったので食器棚に手をかけた時、上の階からの異様な物音に不安を覚え、裏の窓を開けて確認したところ、中国人の暴動が三階を襲う音だと気付きました。
　時間がない、手に触れた何がしかのお金を掴んで、全部集めたい気持ちを残して裏の窓から逃げ出しました。近所の人達も逃げ出して集団で逃げまどっていました。母はいつも人の後ろをついて回る性格の人でしたので、母の後ろを逃げる私は必然的に一番後ろとなり、棒を振りながら集団で追ってくる中国人の姿が見えていました。やっとの思いで、逃げ込んだ先は満鉄の社宅の三階で、裏が崖になっ

た所でした。何故か、どの社宅も空き家になっていました。どこかのおじさんが私が家に飛び込むのと同時に部屋の鍵をしました。先に着いていた人達は、カーテンや掛布団を引き裂き繋いで窓から逃げ始めていました。おじさんが母を抱えて窓の外に出し、自分と共に降りて行きました。地上に降りたおじさんは、後から追いかけてくる中国人たちに利用されないようにライターの火を布に着け始めました。布はあっと言う間に上に上にと燃え上がり、窓から地上に降りるための手段は燃え尽きてしまいました。私はビックリしてその場に立ちすくんでいましたが、頭の中では凄い人だなあ、こんな人のお嫁さんになりたいなどと、のんきな事を考える余裕さえありました。今までの様々な体験が自分を強くしたんだと、その時は思いました。

足の速かったチビの妹は何時も私の前を走っていてくれたので気に留める必要がなく助かりました。そして最後に逃げ込んだ先は、広々とした築山等を有する、なんと私の家の隣にあった割烹旅館の一角でした。如何に広い旅館か、そして如何に自分たちが動転してめくら滅法に走り逃げ回ったのか、その時改めて理解しました。旅館の人達は誰もいませんでした。どの部屋も畳は隅に積み重ねられていました。早くから何らかの情報が入っていたことは一目瞭然でした。満鉄社宅がもぬけの空き家となっていた謎も解けました。父がいてくれたらなあ…。父恋しさの弱気を振り切って大広間の床下に全員で潜り込み隠れました。どやどやと体の上の床板を踏み、中国語が飛び交い、何かを運び出し始めました。床板は揺れ、きしんでいました。押し入れの中に米俵が隠されていたのでした。身が堅く縮みました。人の重みで床板が運悪く妹の上で折れました。「アイヤー　ショウハイ」（あらら－　女の子だ）と言いながら背負っていたリュックサックと一緒に妹が持ち上げられてしまいました。他の皆も見つかってしまいました。母親たちは皆、手を合わせて拝むように何度も頭を下げるばかりでした。リュックサックが妹の肩から抜けて、妹が落ちてきた瞬間に、私の手が伸び妹を床下に引きずり込み、中国語と日本語のちゃんぽん語で「荷物はやるからニイゾウバ　ショウハイ　胸病気ね」と言い放つと、身振り手振りが分かったのか戦利品の米があったからなのか、リュックサックの中身が気になったのか「ハオハオ」と笑いながら出て行きました。私達を追ってきたグループとは別の人達の集団だったようです。

中国人の暴動はすぐに収まり、ヤレヤレと思う間もなく今度はロシア兵の「女狩り」が始まりました。真っ先に男の人達が連れていかれました。あの時のおじさんが、「頑張って日本に帰えれよ、自分は漁師だった。家族は日本にいる。おじさんもきっと日本に帰るからな」と振り返り話しかけ、ロシア兵に蹴飛ばされながら連れて行かれました。ショックで涙もでませんでした。多分シベリア組となった事だろうと思います。

その頃、吉林駅では、武装解除の目的で日本兵が集められ、日本へ返すという言葉に騙されてシベリアへ送られたと後になってから聞かされました。中国人の暴動は八路軍か政府軍かわからないが一部の地域のみで、数日経つと何となく落ち着いてきたかに感じました。

私たちが隠れていた旅館には、味噌を始め様々な日本の食品が大量に隠されていて、食べるものにはあまり困らなくて助かりました。しかしながら、全ての雨戸を閉めての女ばかり三十人くらいで寄り添っての暮らしもすぐに恐怖へと変わりました。ロシア兵の「女狩り」は頑丈なドアを足で蹴破っての侵入で始まります。座り込んで縮こまっている私達には、ロシア兵は大鬼が銃を構えた姿そのものでした。一人一人に銃口を向けて歩き廻り、生きた心地はしませんでした。同級生のお姉さんの前で足が止まり、銃で顔を上げられました。その瞬間同級生が、まるでサルが飛びついたかと思うような勢いでロシア兵の

手にガブリと噛みつきました。銃で張り飛ばされた友達の大泣きにビックリしたのか、銃口は別人の前で止まり連れていかれました。三人のロシア兵が引きあげた後その娘さんは防空壕の中から鍵をかけて死んでいました。大和撫子の最後の姿をこの目で見たような気がしました。自決したその顔は紫色に腫れ上がっていました。最後まで抵抗したんだね。誰もが明日は我が身の思いで声も出なかったと思います。色黒で良かったと、その時ふと校長先生を思い出しました。どうして一大事のこんな時に「思い出」もないだろうと、私は少し変な人間ではないのかと本気で心配になりました。

床の下に布団を持ち込み隠れ家を作りました。その頃には毎日のようにやってくるロシア兵に母親たちも、顔に墨を塗り待ち構えての行動となっていました。「ハラショ　マダムエイシ」と土足での来客に「ハラショ　マダム　メイユウ無い無い」と三か国語での応戦です。可笑しいやら怖いやら。ロシア兵達は手当たり次第に持ち去っていきました。手足には腕時計が鈴なりになり自慢する客に拍手喝采する親たち。床下から這いあがっての、しばしの笑い話に時がながれました。何と無知野蛮なこんな国に負けたのかと信じられない思いでした。前のホテルがロシア兵の住居でした。窓には母の裾除け。その頃になって北の方から避難民の仲間たちが加わり心強くなってきました。

ある時期以降、ピタリと客足が止まりました。ロシア軍の部隊が新しく変わったらしかった。全てがはっきりとは解らない日々が続きました。でも、治安が少しでも収まってくれたことは嬉しかった。母達の炭塗もなくなってヤレヤレ、「女狩り」も収まり、これからどうなるのかと明日の事が心配となっていきました。

第七章　父との再会

新京に入隊していた父が突然口髭にチャイナ服姿で中国人三人と入ってきました。父の話では、「武装解除目的の新京駅への集合に不信を感じて仲間二人で軍を逃げ出し、今まで中国人に帽子の日焼けが消えるまでとかくまわれていた。まだ危ないので生きていることだけを知らせに来た」と中国人から馬肉の塊を受け取り、ドサッと床に置きました。「ジャングイ　早く」（旦那さん、早く）と中国人に急がされながらまだ危ないからと出て行きました。父には、中国人の中に深い何かの関係があると感じ「シェーシェー」と頭を下げました。「心配いらない、お父さんすぐに帰ってくるあるよ。」と日本語で話しかけてきました。父はきっと日本人のために何か頑張っていてくれているんだと強く感じました。そんな匂いが父にはありました。そして、そんな父が帰ってくるまで母と妹を守るのが私の重大な使命だと感じました。

数日後、父が一人の若い男の人を連れてきました。「しばらく頼む」の一言でした。日本人の若い女の人が男に変装した姿に、母がすぐに気が付きました。「まあ、よくご無事で」と泣いていました。私はしげしげと、何だか変な気分でその男いや女の人を見ました。女の人の顔は見覚えがありました。正月のお祝い事や店の招待客のもてなしの時に手伝いにきてくれていた芸者さんでした。父の話によると、その女の人は日本の特務機関の将校さんの想い人だったようでした。その将校さんが八路軍に捕まり、銃殺されて山のように積まれた死体の中に捨てられているので何としても探し出したい。「盗みに潜入する」と聞いた時、父が軍の中に深い関わりを持っていた事に初めて気づかされました。自分の死を覚悟しての行動であったと思いました。引き留めることはしませんでした。いや、できなかったのです。私の体の中の日本人の血がふつふつと燃えていたのです。数人の中国人と父の無事を念じながら、自分が男だったら父の後から着いて行きたいと思いました。潜入は成功して形見の髪の毛と爪が日本の両親と彼女へと二組届きました。遺体

は皆裸にされていて銃殺で野晒だったと後日聞きました。

十月に入ると、雪がちらつき始めましたが、布団は山のようにありましたし、朝になると庭の隅に何処からか蒔が積まれていました。日本人の子供達が寒さに震えながら首から下げた箱に煙草を入れて「買ってください」と中国人に頭を下げてすがるのを見るのも哀れで悔しい光景でした。そんな時関東軍は一般の日本人を満州に捨てて逃げて帰ったという噂が駆け巡りました。また、特権階級の一般人家族は早々と帰国させたという噂が流れました。日本軍に対する不信の念は日ごとに強くなっていきました。学校のあの若い兵隊さんはロシア軍に踏み殺され捨てられたのか保護されたのか調べる術はありませんでした。北の方からの避難民は日ごとにどんどん増えていきました。汚れた袋を一つ抱えて極寒の満州で、日本に帰るんだの一心で消えそうな命と戦いながら、祖国への思いを胸に路上に冷たくなってゆく。数知れず、ぼろ布のようにである。

異国での緊張の続く暮らしの中、父が戻って来ました。中国人姿には変わりなく、すぐにみんなのまとめ役となりました。この冬を生き抜けば春には日本に帰れる。皆で頑張ろうと励ましあいました。

寒い冬の朝、開拓団から逃げてきた子供が母親に抱かれたまま冷たくなっていました。三か月ほどの付き合いでしたが、身内を亡くした様で皆でお通夜をしました。箱を見つけ香典として皆から何かしらのお金を集め、私の母親は日本に帰る時のために持っていた着物を取り出し、皆で帽子、靴下と持ち寄り、可愛らしく着せてやりました。私は大切にしていた紙で花を作り、母はひと時も母親のそばを離れずに慰めていました。きっと、日本で亡くした弟の事を思い出していたんだろなと思いました。中国人にお金を包み埋葬を頼みました。当時としては奇跡のような送りでした。

翌朝外を見て仰天しました。亡くなった子供の真っ白な小さな体は丸裸で、犬が盛んに喰いちぎって振り回していました。頭から血の気が引いて吐き気を覚えました。子供の母親は化石の様になっていました。この国では、小さな子供が死んだときにはそうする事がしきたりで悪意ではないらしかった。私もそこまでは気が回りませんでした。「どうやら、犬が食べなかった場合には、犬も食べない子供として、悪い子となるらしい。」という父の言葉に、私はこんな国に生まれなくて本当に良かったと思いました。そして、その犬もまたいつの日にか中国人の胃袋の中に入る運命にあるのです。本当の話だと聞いて、いよいよこの国が嫌いな国となりました。かちかちに凍った夜の庭に穴を深く掘り埋葬してやりました。

暴動の時の様子を話して、お金を持ち出せなかった事を始めて父に話しました。その金を集めていたら、今の私達の命は無かったと母をかばいました。妹のあの時の事や、ロシア兵の侵入で怖い目に会った事も話しました。暫く黙って座っていた父は母に一言「ばか者が」と言い残して出て行きました。皆は自分の事の様に心配してくれ「命は金では買えないもんなあ」「あんたはいい判断をしたよ」と慰めてくれました。三日ほどで父が戻って来ました。軍の馬の世話を中国人にさせていた事、自分がその人達に助けられた事、馬を金にして半分は今までのお礼にその仲間に残してきた事、そして皆でこの金で日本に帰るまで頑張ろうと話してくれました。腹に巻きつけたお金が入った布を皆の前に置きました。父はお金を一か所に置かず皆に配りそれぞれが腹に巻いて寝ました。皆は「宜しくお願いします。ありがたい。助かります。」と父に頭を下げていいました。父は「この金は自分だけの金ではない。今まで日本人のための仕事をしてくれた中国人からの贈り物と思ってください。別れ際に中国人が『中国人　皆皆悪い人違う、日本に帰る事力になります。またいつか中国へ来て下さい。』『安心してください。私達守ります。』と別れを惜しん

でくれた」と話してくれました。私は、父は大酒は飲むし、女遊びはするし、母を泣かすし何時も何処かで秘密めいていたので、心から好きになれませんでしたが、その時ばかりは目を見張りました。誇らしくもありました。（でも、酒飲みの嫁さんにはならんよ。）

ある朝、庭に、チャイナ服や靴等が置かれていました。彼らからの心遣いが嬉しくありがたかった。国は国、人は人成りであることを痛感しました。

ロシア軍のジープが止まり銃を構えた三人のロシア兵が入ってきました。銃を突き付けられ、私達親子はジープへと連行されました。瞬間殺されるんだと思いました。父の日本軍への関与が頭をよぎりました。

何故か、自分たちの事より残されたみんなの事が気になり、別れが辛かった。声もない別れでした。振り返ることはできませんでした。あの時のお金を皆に配分してて良かった。それだけが救いでした。こんな自分達の生死の問題の時にも又、他人事の様な自分に気が付き、死ぬ時は日本人として恥じない行動をと硬く心に言い聞かせました。ジープは日本商社が立ち並ぶ日本人町のとある商社の前に停車しました。ロシア兵が出入りしており日本人の姿はありませんでした。家の中へと連れ込まれました。奥の方から父より年配の将校さんらしい人物が現れ何やら話だしました。大きな手が私の頭に触れました。笑顔でした。この国の人は人を殺す時に笑うんだと思いました。何人もの死を見てきた私には親子揃って死ねるのならと妹の手をしっかりと握り締めていました。「私にも君のような男の子がいる。下の子は女だよ」通訳の顔を穴があくほど見つめました。「将軍の言葉です。怖がらないでとも言っています。」私の体全体から冷たい汗が流れて、震えていました。

しかし、そこにはさらに信じられない光景が・・・・　将軍と父の握手をまるで乃木大将とステッセルのようだとボンヤリと見ている私がいました。涙が出てきましたが、嬉し涙ではありませんでした。悔し涙とも違う、涙腺から勝手に涙が湧いてでてくるのでした。その時の妹と母の様子は今は思い出せません。

私達家族が連れていかれたのは、大馬路に面した私の家から約一キロぐらい離れた関東軍の隊舎後に入った将軍の住まい兼連絡事務所の様なところでした。その日から、父はロシアの人の洋服を縫製して、私と妹は将軍の室の掃除を命じられました。裏に私達家族の家が用意されていました。思わぬ展開に戸惑いながらも、日本に帰る日まで頑張るしかなかったのです。掃除の時は鍵を開けて室に入り、終われば鍵を閉めて出る。室にはロシア飴やクッキーが用意されていました掃除の代金として月に一度俵の形の金の玉が支給され、小粒ながら手ごたえのある物でした。金の玉は二つ、三つと増えていきました。思えば、誰が私たちをここに送り込んだのか、更に解らないのは私達に鍵を預けっぱなしなのが不思議でなりませんでした。妹が「ロシア飴屋のおじさんと違うかなあ」と、そう言えば、家の横にあったロシア飴の店によく遊びに行っていたのを、思い出したけどまさかそんなことはないだろうと・・・・・・。

第八章　引揚の道そして日本へ

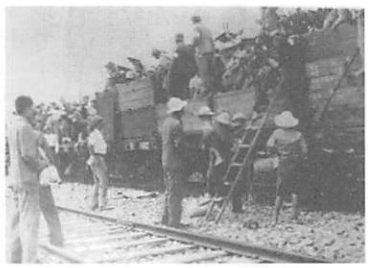
七月に入ったころから日本への引き上げの話が始まり「ショウトル市場」（泥棒市場：日本人から取り上げた品物や、日本人が食べ物とただ同然で交換させられた着物などが売られていた）という処へ家族で出かけました。十二月には武運長久を願い近くの神社へ参拝に出かけま

吉林神社

した。まだ小学生の頃、防寒靴の足がジンジンする寒さの中、手を合わせた吉林神社前の広場でした。

何でも金さえ払えば手に入りました。持てるだけの必要品を買い揃えました。父は保存食にと肉や野菜や味噌を、そしてそれを携行するための羊の皮を何枚も買いました。豆、米も用意しました。母は毎日セッセと縫い物に励んでいました。肉みそ、炒り米、非常食もできて待ちに待ったその日が来ました。私達はその地区に居住する人達の隊に同行することとなり、昭和二十一年八月十六日吉林駅に集合しました。ジープで送ってくれました。ジープが私達の家の前を通った時、懐かしさと寂しさで胸が詰まりました。

ホームに入ってきた列車は、牛や豚の輸送用であった屋根のないいわゆる無蓋車でした。皆な急拵えの梯子を踏んで黙々と列車に乗り込んでいきました。背中の荷物が触れ合うほどに詰め込まれました。お互いに背中の荷物を降ろしあい、出来た隙間に腰を下ろして座ることができました。ガタンと動き出した列車、決して乗り心地の良いものではありませんでしたが、とても嬉しかった。これで、やっとやっと日本に帰ることができる。「走れ走れ、進め進め六年間の想い出よさらば、赤い夕陽の満州よさらば」と心の中で叫びました。あの時中国人の暴動から逃げ回っていた皆は先に帰ったのか、まだなのか気になっていました。



当時、中国では日本人の娘を嫁にもらうと言う事は、とても名誉なことで財産家はお金にものを言わせて日本娘を物色していました。敗戦の直前、中国人の嫁になる事の手付金を取り交わしていた友達が、敗戦と同時に嫁として連れて行かれ、親が日本に帰るので迎えにいったところ家の奥に閉じ込められて、日本に帰る事ができませんでした。そんな友の顔が、走馬灯の如く頭の中を駆け巡ります。

一時間も走ったところで突然列車が止まりました。それまでの安堵感が一挙に不安に変わります。各列車の班長が集められました。金の無心でした。車夫の、悪代官も顔負けの人の弱みに付け込んでの早々の行動だったのです。やっと動き出した列車は次に新京駅で止まりました。駅は沢山の日本人達で溢れていました。空腹を満たすのに、中国人達のポーズ売りには助かりましたが、彼らの生きるためにすぐに行動する逞しさや、昨日までは日本人を襲っていたのに、その日本人が今日からは客となっている。その変わり身の速さは、彼らの身に付いた技なんだと思いました。何度も止められては金の無心、或る処では車内に入り込んで物品の要求をする。でも何処かおどおどとしていて無理強いはしなかった。

長旅の中に不幸が起きました。小さな子供が冷たくなっていました。悪環境の中で今まで頑張って来たのに、夏の盛り、腐敗が進みます。手放し難い母親、困り果てた班長は車夫に申し出ました。入ってきた車夫は無造作に子供を取り上げ走る列車から外に投げました。母親はキャーと叫び、止める間もなくその後を追っていきました。これが戦いに敗れた国民の実態でした。残された母親の荷物は供養にと手を合わせながら車外に投げられました。ここまで来たんだ、頑張って力を合わせて日本に帰るんだと団結を新たにしました。青々とした畑の中で止まった列車に近づいてくるポーズ売りの女、母がポーズを購入しようと慌てて梯子を踏み外し、捻挫した足が見る見る膨れあがりました。父はポーズ売りの女に酢と小麦粉を頼み金を渡しました。女は汗をかきながらポーズと粉と酢を父に渡しました。私は、「シェーシェ」「オーシャン リーベンチュイ」（私は、

日本に帰ります。）と女と握手しました。走りだした列車に中国人女性は姿が小さくなるまで手を振り続けていました。胸に熱いものを感じました。早速小麦粉を酢でとき布に伸ばして母の足を包み布で縛りました。手際が良いと褒められました。学校が野戦病院となったあの時の事を思い出して行動をした訳で、体が勝手に動いたに過ぎなかったのです。

続く

（公財）海原会寄付者芳名簿

（敬称略）（単位千円）

令和二年五月一日より

五　小野　源伯（乙23）茨城
一〇　藤野　つね（19遺）埼玉
五　住谷　定（甲15）茨城
五　横手　利秋（乙22）福岡
五　岩澤　純造（乙20）神奈川
五　白坂　忠良（甲14）福島
一〇　有瀧　玲子（一般）三重
五　渡邊　啓司（甲14）静岡
五　塩澤　貞夫（甲16）東京
二〇　萩谷　元男（甲9）茨城
三〇　中西　明（乙6）大阪
一〇　磯貝　孝子（一般）神奈川
五　藤原　清仁（乙20）埼玉
五　松浦　健三（甲14）栃木
五　増田　幸一（乙20）静岡
一〇　北村　直也（甲13）長野
五　遠藤　正男（甲12）千葉
五　大久保浩之（甲14）佐賀
五　松下　輝雄（特4）岐阜
五　豊田重次郎（乙22）福岡
一〇　川岸　義視（乙19）北海道
一〇　藤野　つね（19遺）埼玉
一〇　中原　耕三（甲13）北海道
一〇　原島　淳子（一般）東京
五　仲居　照栄（乙20）千葉
五　若月　良介（一般）静岡
五　村木　良治（乙22）大阪
三〇　予科練十九期会（乙19）
五〇　武器学校OB会

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

五月

二十九日

第五十三回　予科練戦没者慰霊祭

於　雄翔園

菅野理事長、小林会長、酒井副理事長、安井副理事長、徳永霞ヶ浦支部長、平野理事が出席して、予科練之碑前で献花及び黙祷を行った

六月

六日

同窓生証言記録撮影

於　土浦市内ホテル会議室

甲飛十三期生の徳永三好理事から予科練入隊時の証言を聴取した

インタビュー：行方参与

撮　影　：平野理事

十八日

法人登記事項の改正

於　事務局

評議員会において決議された、評議員及び理事の交代について、登記事項の改正を法務局に申請

三十日

内閣府への報告

於　事務局

令和元年度事業及び経費の執行状況について、評議員会の決議に基づき、平野事務局長が内閣府に報告

七月

三日

雄翔園手水鉢樋の交換作業

於　雄翔園

例年慰霊祭前に実施していた樋の交換を、徳永霞ヶ浦支部長と湯原豊一郎理事が実施した。

十六日

事務局移転検討のための意見交換

於　事務局

事務局移転に関する意見交換を事務局において実施した。

参加者：安井副理事長、平野事務局長

二十日

予科練平和記念館運営協議会出席

於　予科練平和記念館

出席者　平野事務局長

二十三日・二十四日

京都堀川高校2年生自主研究支援

高校の自主研究の命題に「特攻隊」を選定した高校二年生の研究活動の支援を行った。

於　筑波空記念館・予科練平和記念館・雄翔館

参加者　徳永霞ヶ浦支部長・平野事務局長

「予科練」第460号9・10月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1回1日発行）
令和2年9月1日発行
編集人　保坂俊雄
発行人　菅野寛也
発行所〒140-0013
公益財団法人　海原会
東京都品川区南大井6―16―12
（大森コーポビアネーズ）
郵便振替　00140―9―54332
☎03―3768―3511
FAX 03―3768―3511
定価500円

お墓　首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

東京都・足立区
舎人浄苑
在来仏教

0.90㎡～
東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。

東京都・港区
高輪メモリアルガーデン
在来仏教

0.45㎡～
都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

東京都・町田市
町田いずみ浄苑フォレストパーク
宗教不問

0.90㎡～
緑豊かな武蔵野・横浜みなとみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

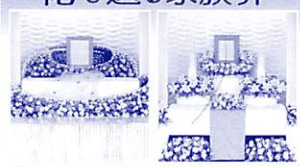
東京都・八王子市
東京霊園
宗教不問

3.00㎡～
四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

お葬式　家族葬から社葬まで、おまかせください。

花で送る家族葬

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応えする10名様程のプランです。花祭壇は「風」と「癒」の2種類から選べます。



10名様用
会員価格　580,000円～（+税）

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご案内できます。

- おおのやホール小平　携帯・PHS OK 通話無料 0120-57-2222
- フューネラルリビング横浜　携帯・PHS OK 通話無料 0120-40-0785
- 常光閣斎場（千葉）　携帯・PHS OK 通話無料 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所　携帯・PHS OK 通話無料 0120-79-8008

お仏壇　ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。

海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀（祭壇費用）・お仏壇を会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓　墓所工事 10%割引
お葬式　祭壇価格から 20%割引
お仏壇　25%割引

お問合せは、海原会事務局へ　☎03-3768-3351

株式会社メモリアルアートの大野屋は
甲飛十四期生　元海軍一等飛行兵曹　大澤靜雄の次男　大澤靜可の経営する、お墓・お葬式・お仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージキャラクター 市田ひろみ

メモリアルアートの大野屋

大野屋テレホンセンター
葬儀のご依頼（緊急ダイヤル）24時間受付
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談　(9:00~20:00)」
携帯・PHS OK 通話無料 0120-02-8888

メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp

全優石 全国優良石材店